

登場人物

末吉（男）

紺野（男）

白鳥（女）

花村（女）

郊外の病院内に併設された研究センター。その中にある実験動物飼育棟の休憩室。テーブルや椅子、少し離れてソファもあり、テーブルの上には求人雑誌と化粧ポーチ、少し離れた脇机には自由に利用できるコーヒーマーカーがある。作業服姿の末吉が求人雑誌を読んでいる。

そこへ紺野があらわれた。

紺野は部屋の空気の変化に気づき匂いを嗅ぐと口を開いた。

紺野 末吉。

末吉 はい。

紺野 カレー食っただろ。

末吉 ……はい。

紺野 （胸元を指して）付いてるよ、そこ。

末吉 ああ。

紺野 気をつけろよ。動物は臭いに敏感なんだから。

末吉 すいません。食欲なくなってる。

紺野 えっ。

末吉 今日食欲なかったんで。すいません。

紺野 どういうこと。

末吉 いや、俺、食欲ない時はいつもカレーなんで。

紺野 知らないよ。いや、わかるけどさ。

末吉 テレビでやってたんです。

紺野 テレビ。

末吉 傭兵っているじゃないですか。

紺野 よーへい。

末吉 外人部隊とか、雇われて戦争に行って戦ったりする。

紺野 ああ、傭兵。

末吉 日本人でもいるんですよ。で、その傭兵が言ってたんです。ジャングルの戦闘で一番大事なものは何かって。

紺野 なに。

末吉 何だと思います。

紺野 え、クイズ。

末吉 はい。

紺野 面倒くさいよ、お前。

末吉 いいじゃないですか。ジャングルの戦場で一番大事なものは何か。

紺野 わかんない。なに。

末吉 当ててみて下さい。

紺野 なんだよ、折れない心とか言うなよ。

末吉 言いませんよ。もっと現実的に。

紺野 ナイフ、じゃあ普通すぎるよな。んー、食料。

末吉 惜しい。もっと厳密に。

紺野 いいから教えろって。

末吉 カレー粉です。

紺野 そのまんまだな。

末吉 でも意外でしょ。ジャングルの戦場で一番大事なものが、ナイフでも銃でもなくて、カレー粉って。

紺野 まあな。

末吉 ジャングルで戦ってる時って、まともな食糧は支給されなくて、自分で鳥とかトカゲとか、とにかく食べそうなものを何でも捕まえて、サバイバルしながら進むんですって。そういう時にね、カレー粉を付けると、とりあえずどんなものでも食べられるようになるって言っていました。

紺野 へえー。

末吉 それ聞いて、俺もカレーなら食べられるなと思って。

紺野 それでカレー。

末吉 はい。

紺野 カレーはいいけどさ、飛ばすなよ。ていうか(服に)付いたんなら着替えるよ。不衛生だろ。

末吉 すいません。

紺野、カバンを机の上に置いた。

末吉 あれ、出かけるんですか。

紺野 ああ。外出して直帰。葬式に行けて、室長が。

末吉 葬式。

紺野 自分が行けなくなったら、代わりに行って来いって。

末吉 そうなんですか。

紺野 末吉、おまえ斎藤さんって知ってたっけ。少し前に辞めたパートの。

末吉 いいえ。

紺野 まだウチに来る前だったか。

末吉 たぶん。

紺野 その人がね、亡くなったんだよ。

末吉 そうですか。

紺野 うん。六十は過ぎてたと思うけど。ちょっと早いよね。

末吉 早いですね。病気か何かで。

紺野 たぶん。腎臓がね、悪かったから。

末吉 へー。

紺野 行くのはいいんだけどさ、急に言われたって困るよな。(自分の服を改めて見た)  
スーツ、このままでいいかな。

末吉 大丈夫じゃないですか。黒っぽいし。ネクタイさえ黒かったら。

紺野 ネクタイか。その商店街に百円ショップあったよな。

末吉 コンビニでも置いてるところありますよ。

紺野 百円ショップの方が確実だろ。

末吉 でも、お葬式のネクタイでしょ。あ、そうだ。スーパーの2階。あそこの衣料品  
売り場ならありますよ。

紺野 いいよ、百円ショップで。

末吉 そうですか。・・まあ、紺野さんがそれでいいなら構いませんけど。

紺野 なんだ、不服そうだな。

末吉 別に。

紺野 ここからだ、買って戻ってくるのに一〇分ぐらいか。大丈夫かな。

末吉 何がです。

紺野 白鳥さんと待ち合わせしてるんだよ、ここで。

末吉 白鳥さんも行くんですか。

紺野 うん。準備できたら一緒に行こうって。

末吉 (お葬式は) 何時からですか。

紺野 わかんない。でも普通は2時か3時からだよな。

末吉 そうですね。それぐらいだと思いますけど。場所は、

紺野 それもわかんない。白鳥さんが知ってる。

末吉 そうですか。

紺野 なんせ代理だから。

紺野、テーブルの上の化粧ポーチに気づいた。

紺野 これって、白鳥さんのかな。

末吉 さあ。あつ、

紺野、ポーチの中を開けて見た。

紺野 ほら、化粧品。

末吉 怒られますよ。

紺野 名前書いてないね。

末吉 書かないでしょ、普通。

紺野 匂いでわかんないかな。

末吉 犬ですか。

紺野 (ファンデーションのコンパクトを開いて嗅いだ) やっぱ匂いじゃわかんないな。

末吉 当たり前です。てか、ちよっと変態っぽいですよ紺野さん。

紺野 そんなことないよ。

末吉 なんでちよっと嬉しそうなんですか。

紺野 化粧品って女の匂いがするよな。

末吉 そりゃ、まあ。

紺野 満員電車で密着していると鼻に入ってくる匂いっていうの、あれが凝縮されてる感じがするよね。ほら、

と、紺野、コンパクトを末吉に差し出した。

末吉、罪悪感を感じつつも匂いを嗅いでみる。が、

末吉 あ、俺いま鼻詰まってたんだ。

紺野 えー。

末吉 ちょっと風邪っぽいんですよ。

紺野 つまんない奴だな。

末吉 詰まってますよ。(鼻が)

紺野 だからカレーが付いても気付かないんだよ。

末吉 ドキドキして損した。

紺野 とにかく、風邪は早く治せよ。実験動物にウイルスがうつったらシャレにならないんだからな。

末吉 大丈夫ですよ。正確には風邪じゃなくて風邪っぽいだけですから。

紺野 あのな、風邪っぽいってことは風邪ってことなんだよ。ウイルスは持ってるの。

末吉 そうか。

紺野 そうだよ。それでなくても先週、感染症出て室長。ピリピリしてるんだから。

末吉 ああ。でもC群だったんですよ。マウス同士にしかうつらない。

紺野 そうだけど、同じ部屋のマウス全部処分だよ。

末吉 えっ。

紺野 えっ、じゃないよ。マニュアルに書いてあっただろ。「終息条件は、原則として汚染動物が発生した飼育室における対象動物の全頭処分とする」って。

末吉 Cでもそうでしたっけ。

紺野 そうだよ。ちゃんと確認しとけよ。

末吉 厳しいですね。

紺野 まあな。

末吉 原因はなんだったんですか、感染症の。

紺野 まだ調査中。

末吉 結局何ケージ感染してたんですか。

紺野 5ケージ。

末吉 それで全頭処分か。

紺野 6ケージはあったからな。8千匹ぐらいが今は炭素だ。

末吉、少し黙った。

紺野 大変だったよ。金曜日にマウス室全員残業して作業して。今日は今日で朝から洗  
浄、消毒、さらに消毒だ。

末吉 ええ(曖昧にうなづく)

紺野 そっちの大型動物も、人間から感染することがあるから、ホント、体調管理には気を付けてくれよ。

末吉 わかってますって。

話題を変えようとしたのか、末吉が切り出した。

末吉 でも俺、ここで働くまで風邪なんかひいたことなかったんですけどね。

紺野 そうなの。

末吉 なのにここで勤めだしてから、身体が弱くなったみたいで。

紺野 なんだそれ。

末吉 ここって毎日すげー消毒してるじゃないですか。それが逆にクリーンすぎて免疫力が落ちてるんじゃないかと思うんですけど。

紺野 そんな非科学的なこと言うんじゃないよ。

末吉 化粧品で匂いで持ち主を特定しようとした人に言われたくないですって。

紺野 (思い出した) あ、そうだ、白鳥さん。

紺野、携帯電話を出し、かけてみた。

紺野 もしもし・・・

電話はつながらなかったようだ。

紺野 メールしとこ。

紺野、メールを打ち始める。末吉、話題は逸らしたがやはり気になったようだ。

末吉 紺野さん、

紺野 ん、

末吉 聞いていいですか。

紺野 なに。

末吉 さっきの話。感染してたマウスのケージって、誰の担当だったか分かってるんですよね。

紺野 一応ね。

末吉 誰だったんです。

紺野 (少し間) 言えない。

末吉 (紺野を見た)

紺野 気になるか。

末吉 そりゃあ、まあ。

紺野 なんて。

末吉 なんてって。

紺野 ひよっとしてさ、

末吉 なんです。  
紺野 お前、マウス室に気になる人でもいるの。  
末吉 (少し間) いませんよ。  
紺野 花村さん。  
末吉 違いますって。  
紺野 大丈夫、花村さんじゃないから。  
末吉 そうなんだ。  
紺野 (ちよつと笑った)  
末吉 違いますって。  
紺野 あのさ、末吉。  
末吉 はい。  
紺野 お前さ、土曜日の夜、どこ行ってたの。  
末吉 えっ、どこって。  
紺野 飲みに行ったでしょ、花村さんと。  
末吉 行ってません。  
紺野 行ってたって。  
末吉 行ってませんって。  
紺野 行ってたって。  
末吉 行ってませんって。  
紺野 行ってたって。ちやーんとウラとってんだから認めたほうがいいよ。  
末吉 ウラってなんですか。  
紺野 俺はね、一応管理職だから、常に社内の情報は入ってくるようにしてるんだよ。  
末吉 怖いですよ。  
紺野 仕事柄メンタルな部分って響くからね。で、どうなの。  
末吉 ・・行きました。  
紺野 ほら。  
末吉 なんなんですか。なんでちよつと笑ってるんですか。あーもう・・  
紺野 ね、花村さんってさ、何か言ってなかった。  
末吉 何かって。  
紺野 感染症のこと。  
末吉 それは何も。  
紺野 ホントに。  
末吉 本当です。  
紺野 そっか。  
末吉 一応守秘義務あるんで。お互いに。  
紺野 なるほどね。(間) で、どうだった。  
末吉 なにが。  
紺野 花村さんとき。盛り上がった。  
末吉 知りたいですか。  
紺野 知りたいよ、そりゃ。  
末吉 じゃあ正直に言いますけどね、全然盛り上がりませんでした。  
紺野 全然。

末吉 ええ、もう全然。6時ごろから飲み始めて、普通に世間話して。彼女、魚が好きだって聞いたから魚の旨い店探したのほとんど料理に手をつけてくれなくて。挙句に8時には解散ですよ。

紺野 健全だね。

末吉 俺、もう一軒一人で行きましたもん。

紺野 そっかそっか。残念だったね。

末吉 なんでちよつと嬉しそうなんですか。

紺野 そんなことないよ。

末吉 でもさっきの話でちよつと判りました。

紺野 なにが。

末吉 なんか元気なかったんですよ。

紺野 花村さん。

末吉 ええ。楽しくなかったのかな、と思って落ち込んでたんですけど、全頭処分だっ

たんですね。そんな状態の時に、なに一人ではしゃいでたんだろう、オレ。

紺野 はしゃいでたんだ。

末吉 きつと全力で空回ってたんだ。あー、へこむわー。

紺野 元気出せって。

末吉 出せませんよ。

紺野 まだフラれたと決まったわけじゃないだろ。

末吉 ちよつとでも気があったら、土曜の8時に解散しませんよ。

紺野 見たいテレビでもあったんじゃない。

末吉 俺はテレビ以下ですか。

紺野 またチャンスはあるって。世界の半分は女だよ。

末吉 紺野さん。

紺野 ん。

末吉 紺野さんって職場結婚だったんですよ。

紺野 うん。

末吉 うちってほとんどの人が職場結婚ですよ。

紺野 そうだな、仕事柄そうなっちゃうかな。

末吉 紺野さん、俺、ここで働いてる限り出会える気がしません。

紺野 なんで。

末吉 なんか、みんなダメっぽいんです。

紺野 あーそう。室長は。

末吉 嫌ですよ。ほぼオカンじゃないですか。

紺野 女は包容力だよ。もし結婚できたら即社長じゃない。

末吉 人ごとでしょ。

紺野 まーね。

末吉 最近ちよつと絶望的に思えてしょうがないんですよ。

紺野 あ、もしかして末吉、それで求人雑誌読んでんの。

末吉 え、いやこれは別に。ここに置いてあったから見てただけですけど。

紺野 置いてた。

末吉 ええ。

紺野 誰が。

末吉 さあ。

紺野 そんなの見るなよ。

末吉 でも最近はどういうのが相場なのかなと思って。

紺野 相場。

末吉 給料とか、待遇とか。

紺野 どうなの、相場は。

末吉 ざっと見ましたけど、どこも噛み応えありそうな求人ばかりですね。

紺野 噛み応え。

末吉 飲み込みにくいってことです。

紺野 うまいこと言うね。

紺野、末吉の持っていた求人情報誌を取って読み上げる。

末吉 あつ。

紺野 『充実した研究施設で、最先端のテーマに日々没頭する。研究職への夢を、今、叶えてみませんか。』

末吉 いちいち声に出して読まないでくださいよ。

紺野 こういうコピーって声に出して読むと、なんか白々しくておかしいよね。(読み上げる)『年間休日一二〇日。実働八時間勤務。各種社会保険完備。月給一九万五千円以上。』どう? 行ってみる?

末吉 最先端の研究職で十九万は微妙ですよ。

紺野 だよ。

末吉 実働も八時間ってことはないでしょ。残業、月五十時間はありそうですよ。

紺野 で、土日は交代で出勤。

末吉 ええ。年間の休みは実際一〇〇日ってところじゃないですか。

紺野、別のページをめくって読み上げた。

紺野 じゃ、これは? 『夢はデッカク気持ちは熱く。月給三〇万円以上の店舗責任者候補。実働八時間。土日完全週休二日制。各種社会保険完備。』

末吉 夢はでつかくって言いながら雇われ店長って、どうなんですかね。

紺野、末吉を見た。

紺野 末吉、そんなことじゃ転職できないよ。

末吉 だからしませんって。

紺野 ホントに。

末吉 はい。あ、でも、

紺野 なに。

末吉 一生ここで働くって言えば嘘になりますかね。

紺野 じゃあ、したいんじゃない、転職。

末吉 今すぐどうこうってわけじゃないですよ。そうじゃないけど、いつかは。  
紺野 いつかは。

末吉 いつかはまあ、俺も男ですから、家族を養えるぐらいの仕事には就きたいな〜って。

紺野 そっか。

末吉 おかしいですか。

紺野 おかしくないよ。うん、全然おかしくない。

末吉 いつまでもバイトじゃられないし。資格あったって俺、2級しか持ってないし。

紺野 うちの社員にはならないの。

末吉 いやあの、こんなこと言うのはアレなんですけど。

紺野 うん。

末吉 うち、給料良くないじゃないですか。もっと上の資格取れば違うんでしょうけど、そんなの会社も求めてないみたいだし。

紺野 そんなことないよ。

末吉 え、でも1級取りたいから勉強させてくれて言ったら断られましたよ。

紺野 誰に。

末吉 室長。

紺野 あ、そう。

末吉 実験用の動物って、沢山売って儲ける仕事じゃないのはわかってますけどね。お客さんだったって、うちの病院だし。新規開拓なんてできるキヤパ持ってないし。だからギリギリの社員数でアルバイトを効率よく使うしかないじゃないですか。パートとか。それなら早いとこ他の可能性を考えた方がいいのかなって。

紺野 お前、そんなこと考えてたんだ。

末吉 一応。

紺野 ちょっと残念だな。

末吉 すいません、なんか。

紺野 いいよ。邪魔しないから熟読したら。

末吉 (反論しかけるが、あきらめて仕方なく求人情報誌に目を落とした)

紺野 でもさ、お前の言う噛みごたえのある職場ってのが、今俺たちのいる現実だからね。

喪服姿の白鳥があらわれた。

白鳥 お疲れ様です。

紺野 白鳥さん。

白鳥 はい。

紺野 メール見てくれたかな。電話もしたんだけど。

白鳥 え、ああ、(携帯を出して見た。) すいません、全然気づかなくて。

紺野 いや、いいけど。

白鳥 紺野さんが行かれるんですか。

紺野 うん。室長の代わり。

白鳥 室長、行かないんですね。

紺野 ほら例の、感染症のことがあったからさ。あれの対応で追われてるんじゃない。  
白鳥 そうですか。

紺野 白鳥さんの方こそ大丈夫なの。マウス室、まだ消毒してるんでしょ。

白鳥 ええ。でも段取りはつけてきましたから。大丈夫です。

紺野 お葬式って、何時からだっけ。

白鳥 3時です。

紺野 場所は。

白鳥 (携帯電話を見せる) ここの葬儀会館で。

紺野 けっこう近いか。

白鳥 ええ。

紺野 まだ時間あるよね。あのさ、ちょっと商店街まで行ってきていいかな。

白鳥 えっ。

紺野 俺、ネクタイも何も持ってきてなくてさ。

白鳥 ああ。大丈夫じゃないですか。

紺野 そう、助かるよ。あ、そうだ。百円ショップ行くけど、何か要るものあるかな。

白鳥 大丈夫です。

紺野 香典、会社で一緒に出すよね。

白鳥 いえ、別で。個人的に渡します。

紺野 そう。

白鳥 気持ちですから。

紺野 じゃ、ちょっと行ってくる。あ、そうだ、白鳥さん。

白鳥 はい。

紺野 スーツ、こんなんで大丈夫かな。

白鳥 気持ちですから。

紺野 そうだよな。じゃ、ちょっと待ってて。

紺野、去った。白鳥、席に座り、テーブルの上の化粧ポーチを開いて化粧直しをはじめた。

末吉、白鳥を見ている。白鳥、末吉の視線を感じて、

白鳥 なに。

末吉 いえ。なんかいつも作業服姿しか見てないから。新鮮だなと思って。

白鳥、返事せず化粧直しを続けた。沈黙の時間が流れる。

末吉 百円ショップか。どう思います。

白鳥 えっ。

末吉 お葬式に、百円の黒ネクタイ。

白鳥 どうって。

末吉 いや俺、ちょっと抵抗あるんですよね。抵抗っていうか、逆の立場だったら、ちょっと引っかかるだろうなって。

白鳥 何が。

末吉 だって百円ですよ。そりゃ今は何でも百円でありますけど。

白鳥 末吉くんは嫌なの。

末吉 嫌ですね、正直に言うよ。いや、紺野さんだって急じゃなかったら、ちゃんと喪服用意したんでしょうけど。それを差っ引いたとしてもね。やっぱり嫌だな。

白鳥 どうして。

末吉 なんてだろ。わかんない。でもなんか嫌だ。

白鳥 二百円ならいいの。

末吉 えっ、

白鳥 二百円とか三百円とか。あるでしょ、そういうの。

末吉 そういうことでもないんですけど。

白鳥 じゃあいくらならいいの。

末吉 値段じゃないんです。なんていうのかな、それこそ「気持ち」。さっき白鳥さんも言ってたじゃないですか。お葬式っていう人生の大事な時にね、ものすごく末端で対応された、みたいな。悔しさっていうのかな。そういう感じ。わかりますか。

白鳥 そうね。

末吉 いや、そう思うんならちゃんとした店で買えるぐらいの金、俺が出せばいいじゃないって思うかもしれませんけど。

白鳥 思わないわよ、そんなこと。

末吉 俺は思ってるんですよ、自分に。でもね、じっさい俺はバイトで、背に腹はかえられないっていうか。結局こうして、目をつぶってやり過ぎしてる。そういうところが嫌なんです。

白鳥 末吉くんって。

末吉 はい。

白鳥 困った人なのね。

末吉 すいません。

白鳥 でもいいんじゃないかな、そういうところ。

末吉 え。

白鳥 直さなくても。息苦しいだろうけど、悪くないと思う。

末吉 はあ。

白鳥 化粧ポーチを持って末吉に見せた。

白鳥 このポーチ、百円だったの。

末吉 ええ。

白鳥 (櫛を出して) これも。

末吉 はい。

白鳥 (ボトルを出して) この容器も。中身は違うけど。

白鳥、ヘアゴムやリップクリームなど百円だったものを次々と机の上に置いてゆく。

白鳥 これも、これも、これも・・・

さらにバッグの中のハンカチなども出して置いてゆく。

白鳥 ゼーんぶ、百円。

末吉 白鳥さん。

白鳥 (タオルを取って) これなんか68円だった。

末吉 白鳥さん、俺、べつに百円のものが悪いって言ってるんじゃないんです。

白鳥 わかっている。でも、これが私の選択なんだな、と思って。

末吉 選択。

白鳥 (化粧ポーチを手にとって) このポーチ。こんなものでも生地や縫製に沢山の人が関わってる。でもその仕事の値段を、一円でも安くすることに、私は深く考えずに加担して、結局巡り巡って自分の仕事にも影をつくってる。

末吉 影。

白鳥 値段だけじゃなくて、もっと取り返しのつかないことにも。

末吉 取り返しのつかないこと。

白鳥 一円でも安くするために注がれた時間と、たぶん、いのち。

末吉 えっ。

白鳥 ゴメン、不毛な作業ばかりしてたからかな。なんか、この何日間か、そんなことばかり考えてる。

白鳥、出したものを元に戻してゆく。

末吉 白鳥さんも、かなり困った人じゃないですか。

白鳥 うん。そうなのよね、実は。

白鳥、少しわらった。

末吉 聞いていいですか。

白鳥 なに。

末吉 先週見つけた感染症って、誰のケージから出たんです。

白鳥 ああ・・・聞いてどうするの。

末吉 いえ、俺も気を付けなきゃな、と思って。

白鳥 (少し間) 室長。

末吉 えっ。

白鳥 本人は認めてないけどね。見つけたケージ、全部室長が投棄してるマウスのも  
のだったの。

末吉 そうなんですか。

白鳥 だからって働いてた人が亡くなったのに、お葬式にも行かないなんてどうかと思  
うけど。

末吉 それどころじゃないんでしょうね。

白鳥 (末吉を見た)

末吉 すいません。

白鳥 斎藤さんね、腎臓が悪かったの。

末吉 ああ、聞きました。

白鳥 うちに三十年勤めてた。

末吉 そうなんですか。

白鳥 ずっとマウス班で。パートだけど社員と同じ千二百ケージ担当して。聞いたことあるかな、ハンタウイルスって。

末吉 えっと、確かネズミが持つてるウイルスですよね。

白鳥 そう。噛まれたり呼吸器を経由して、ヒトにも感染する。

末吉 ああ。

白鳥 微熱とか鼻炎とか喉の炎症とか。風邪みたいな症状が出て八割ぐらいは自覚のないまま治まってしまっただけど、中には重症化する人もいるの。

末吉 重症化？

白鳥 腎不全とか。

末吉 斎藤さんは元々腎臓が悪かったんじゃないんですか。

白鳥 腎不全は勤めてた30年の間に起こってるの。30年。それだけ長かったら、何が原因なのか証明することは難しいって。でもハンタウイルスは、40年前から30年前にかけて全国の実験室で流行してたの。実験用マウスを感染源として。うちの研究所も昔はハンタウイルスの感染事故があったって。私たちが生まれる前のことだし、資料もほとんど残ってなくて、もう確かめようがないんだけど。

末吉 じゃあ、

白鳥 発症時期もズレてるし、直接の原因は違うかもしれない。でも私は斎藤さんの腎不全とハンタウイルスは無関係じゃないと思ってる。

末吉 ……それで。

白鳥 え。

末吉 それでどうするんですか。

白鳥 お葬式に行つて、家族の人に話そうと思ってる。

末吉 うちの会社を訴えるつもりですか。

白鳥 わからない。斎藤さんの家族がそうするなら協力するつもり。…だけど、どうなんだろうね。

末吉 訴えると思いますか。

白鳥 え。

末吉 斎藤さんの家族は。

白鳥 どうだろ。裁判起こすとなるとお金かかるし、うち、一応病院の一部だから専門の弁護士がいるし。もし万一斎藤さんの方が負けたりしたら、費用は全部負けた方が負担しないといけなくなるし。そこまでして訴えようとするかな。

末吉 白鳥さんは。

白鳥 正直迷ってる。…どう思う。

末吉 どうって。

白鳥 亡くなった斎藤さんのために、家族の人と一緒にうちの会社を訴えた方がいいか、それとも逆に折り合いをつけるように説得した方がいいか。どっちも間違つてないけど、どっちもそうしたいとは思えない。だって、わかるでしょ。私だって、ここでちゃんとやってるつもりなのに、どうしてこんなことになったんだろうって、そん

なごとしか考えられないから。

末吉 難しいですね。・・すいません、なんか人ごとみたいに。

白鳥 ううん。要するにひとごとなのよ、私も。

白鳥 化粧直しを続けた。間。

白鳥 白鳥、自分の顔を鏡で見て、

白鳥 粉ふいてる。

末吉 え。

白鳥 顔。久しぶりにお化粧したら、粉が浮いちゃってる。

末吉 はあ。

白鳥 私ね、乾燥肌なの。だからお化粧しなきゃいけない日が決まったら、逆算して3日ぐらいは下地だけでも塗って慣らしておかないと、すぐに粉ふいちゃうのよね。

末吉 うちの職場、化粧禁止ですからね。

白鳥 でも、お葬式の三日前なんてわからないよね。

末吉 そうですね。

白鳥 昔ね、付き合ってた人がいたの。

末吉 え。

白鳥 結婚したいなーって思ってた。

末吉 ええ。

白鳥 でもね、その人、仕事中に運転してた車でぶつかったの、人間と。

末吉 えっ、

白鳥 ケガさせちゃったの。脊椎損傷で半身不随。出会いがしらで、ブレーキ踏んでも間に合わなかったって。

末吉 それで？

白鳥 仕事中の事故だし、会社にも損害賠償の義務はあったけど、本人も責任があるから、お見舞いとか、示談とか、大変だった。初めはね、私が彼を支えなきゃって思ってたの。でもそんなの全然甘かった。励ましても、見守っても、何やっても、二人ともだんだん疲れていって、元の状態にもどれなくなった。結局、いきなり彼の方が連絡拒否されて、それっきりフェードアウト。

末吉 (白鳥を見てる)

白鳥 人はさ、どんなに好きでも、人を救えないんだってそのとき思い知らされたの。

作業服姿の花村が封筒を手にあらわれた。

花村 白鳥さん。

白鳥 どうしたの。

花村 紺野さんは。

白鳥 ちょっと買い物って。

花村 そうですか。

白鳥 すぐに戻ってくると思うけど。

花村 どうしよう・急ぎだって言われたんですけど。

白鳥 何の書類。

花村 さあ・・

花村、突然座り込んだ。

白鳥 花村さん。どうしたの。

花村 すいません、ちよっと・・

白鳥 医務室に。

花村 いえ、大丈夫です。(だが立ち上がれない)

末吉も白鳥も心配そうに見ている。

花村 ホントに大丈夫です。たぶん、ただの貧血だと思うんで。

末吉 水か何か買ってきましようか。

白鳥 そうね、お願い。

末吉 わかりました。

末吉、出て行った。

花村 すいません。

白鳥 大丈夫。

花村 はい。

白鳥 とりあえずソファまで行ってみようか。

花村、白鳥に支えられ立ち上がる。

白鳥 ゆっくりでいいからね。

花村 はい、

ソファにたどり着いた。

白鳥 そこ涼しいから、少し休憩していった方がいいよ。

花村 すいません。

白鳥 ずっと消毒してるから。私も初めは薬の匂いで気持ち悪くなって、半日ぐらい使  
い物にならなかったわ。

花村 ずっと食欲なくて。

白鳥 そうね。

花村 お腹すいてるのに、食べ物を見ると喉を通る気がしなくて。

白鳥 うん。

間。花村、白鳥をぼんやりと見ている。

花村 なんか、いいですね。その服。

白鳥 そう。

花村 私も黒い服着たいです。死神みたいな仕事してるんだから、黒い服着てる方が落ち着く気がします。

白鳥 えっ。

花村 あ、すみません。何言ってるんだろ、私。

白鳥 封筒を取り上げ、宛名を見る。

白鳥 親展か。

しかし、封筒を開けて中の書類を見た。

白鳥 花村さん。

花村 はい。

白鳥 これ、室長はなんて。

花村 できれば今日処理したいから、紺野さんがまだ居るなら探して、ハンコだけもらってきて、つて。

白鳥、書類を見て少し思案したが、封筒と書類を持って出て行った。  
遅れて末吉、戻ってきた。手にはスポーツドリンクのペットボトル。

末吉 大丈夫？

花村 うん・・

末吉 (ペットボトルを見せて) 飲む？

花村 うん。

末吉、花村を起こし、ペットボトルを開けて渡した。

花村、少しずつ飲んでいく。落ち着いたようだ。末吉、その様子を見る。

花村 なに。

末吉 いや。白鳥さんは、

花村 わかりません。書類見て、出て行ってしまつて。

末吉 そう。

花村は次第に落ち着きを取り戻してゆく。逆に末吉は落ち着かない。

末吉 あ、そうだ。・・ごめんね。

花村 え。

末吉 先週、全頭処分の後だったつて。

花村 ああ。末吉さんが謝ることじゃありませんから。

末吉 でも俺、知らずに、

花村 謝るのは私の方です。ごめんなさい。末吉さんのこと、気分転換にしようとしてしまいました。

末吉 いいよ、俺は。俺で気分転換になるんなら。

花村 ダメです。

末吉 俺じゃ気分転換にもならない。

花村 そうじゃありません。楽しかったです。一緒にお酒飲んで、喋って、笑って、楽しかったです。ちょっと元気になりました。末吉さんの元気を分けてもらえました。でも、私は利用したんだって気がついて。

末吉 利用。

花村 落ち込んでたから、元気になるために。

末吉 それっていいことなんじゃないの。俺は花村さんと居て、楽しかったよ。

花村 それじゃダメなんです。

末吉 なにが。

花村 いい人だったから。

末吉 え。

花村 末吉さん、いい人だったから、気分転換にしちゃダメなんです。

末吉 なにそれ。

花村 本当にごめんなさい。

末吉、求人情報誌を取って、花村をあおぎはじめた。

花村 末吉さん。

末吉 ちょっとは涼しいでしょ。

花村 はい。でも、

末吉 気にしないで。やりたくてやってるだけだから。

花村 ありがとうございます。

末吉 あの時、

花村 え。

末吉 余計な気を遣わずに、もっとちゃんとお互いに考えてること、話できればよかったです。  
たな。

花村 そうですね。

末吉、あおいでる。

末吉 あ、そうだ。言ってたあれ、読んだよ。小鳥とバラの話。

花村 そうですか。

末吉 たしかに救いのない話だね。

花村 ええ。でも、ここに勤めはじめてから、ずっと思い出すんです。

末吉 小鳥がバラの棘（とげ）を心臓に突き刺すところ？

花村 ええ。でも命と引き換えにバラを赤くしたのに、投げ捨てられてしまっって、ホント、救いのない話ですよ。

末吉 花村さんは、その小鳥とウチの動物がオーバーラップするって。

花村 サクリファイスって呼ぶじゃないですか。ここでは、動物たちのこと。  
末吉 ああ。

花村 いけにえ。犠牲。犠牲って、なんなんでしょう。私、自分のマンションに一人でいると時々思うんです。私ももしかしたら、あのマウスとおなじように、この世界で何かの実験のように飼われてるんじゃないかって。

末吉 なにかって。

花村 わかりません。この世界を遠くから見ている何かです。

末吉 SFみたいだね。

花村 はい。末吉さん、大型動物のところにも給水パイプってありますよね。

末吉 あるよ。

花村 あれってノズルのところを押すと水が出るようになってるじゃないですか。

末吉 うん。

花村 毎日ね、何匹か、ケージに敷いてる木のチップを、その給水ノズルに差し込むマウスがいるんです。

末吉 なんて。

花村 わかりません。

末吉 そんなことしたら水が出っぱなしになるでしょ。

花村 ええ。それで朝見ると、ケージは水であふれて、そのマウスは溺死してるんです。

末吉 え、自分で水を出して、溺れて死ぬの。

花村 はい。

末吉 そうなんだ。

花村 毎日、必ず何匹かいるんです。何万匹かいるうちの何匹か。どうしてもそんなことをするのは、いまだにわかってないそうです。私も初めはショックだったんですけど慣れてしまっただんだん事故にさえ思えなくなってきました。でも、もしかしたらあれはマウスが人間の実験に使われてたまるかって、死を選んでるんじゃないかとも思えて。

末吉 尊厳死。

花村 ええ。妄想ですけど。

末吉 妄想だよ。そんなこと。

花村 わかっています。わかっていますけど、あの小鳥の話と一緒に、どうしても思い出してしまっただ。

末吉 サクリファイス。

花村 はい。

末吉 あのさ、思ったんだけど。

花村 はい。

末吉 あの小鳥とバラの話は、報われない自己犠牲の話じゃないよ。

花村 えっ、

末吉 あれはたぶん、恋について書かれた話なんだろう。

花村 恋、ですか。

末吉 読んでみたんだけど、小鳥がバラの棘に心臓を突き刺して、恋の歌を一晚中歌うだろ。

花村 ええ。

末吉 あの歌には順番があるんだ。まず少年少女の胸の中に生まれる恋のこと、そして男と女の魂に生まれる情熱のこと、花嫁の唇にキスをする花婿の喜び。そして最後に、死によって完成される、墓の中でも死ぬことのない恋のこと。

花村 死によって完成される恋。

末吉 ちょうど激しい痛みが小鳥の体を貫き、小鳥はいっそう狂わしく歌い、バラは芯からルビーのように真っ赤になったって。

花村 でもそのバラは小鳥が、大好きな青年のために自分の血で赤くするんです。やっぱり自己犠牲だと思えますけど。

末吉 そうじゃない。墓の中でも死ぬことのない恋というのは、心臓に棘をびったりと押し当てて血を吸わせ続けるようなものだ、あの物語では言ってるんだ。恋とは棘を体に食い込ませ、絶命するまで血を注ぎ込むものだって。そして、そうやって作った真っ赤な花は、美しいけれどあっさり打ち捨てられてしまう、取るに足りないものなんだって。

花村 棘を体に食い込ませ、絶命するまで血を注ぎ込み、美しいけれど取るに足りない、恋。

末吉 あの物語は、そういう、恋愛の一面を描いた比喩だと思う。

紺野、戻ってきた。二人、気づく。

末吉 おかえりなさい。

紺野 だいまー。暑いねー、外は。

末吉 買えましたか。

紺野 おう、ホントに何でもあるな、百円で。余計なものまで買っちゃったよ。

末吉 それが狙いですから。

紺野 まったく思うツボだよ。で、花村さん、どうしたの。

末吉 紺野さんを探しに来て、気分が悪くなったんで・・・

紺野 口説いてたの。

末吉 介抱してたんです。

紺野 (花村さんに) 気をつけろよー。コイツが介抱したら何されるか分かったもんじゃないからねー。

末吉 何にもしてませんよ。

紺野 でもね、コイツ、こう見えて結構お買い得だよ。

末吉 何言ってるんですか、やめてくださいよ。

紺野 こないだワクチン打ったから。猿に引っ搔かれても病気になるの。すごいでしょ、なかなかないよ、猿に引っ搔かれても病気になる男。お買い得。

末吉 俺、ほかに褒めるところありませんか。

紺野 花村さんってさ、感染症対応したの、初めてだっけ。

花村 はい。

紺野 そっか。あれはなかなかキツイからね。まあゆっくりサボってって。

花村 すいません。

紺野 白鳥さんは。

末吉 さあ。

花村 私、室長から紺野さん宛の書類を預かってきたんですけど、それ見て白鳥さんが出て行ってしまつて。

紺野 書類。

白鳥 戻ってきた。手には例の書類。

白鳥 紺野さん。

紺野 あ、ただいま。ごめんね、待たせちゃつて。

白鳥 どういうことですか。(書類を渡す)

紺野、書類に目を通す。

白鳥 どうして先週の感染事故が紺野さんの責任になつてるんですか。

末吉 えっ。

白鳥 感染したマウスは、どれも室長が自分で投棄するからつて、管理してたゲージだったじゃないですか。どうして別室の紺野さんの名前で報告書が作成されてるんですか。

紺野 あー・・・。

白鳥 室長に確認しても、それはそういうことに決まつた、紺野さんも承諾してるから本人から聞いてくれ、つて取り合つてくれないし。

紺野 白鳥さん。

白鳥 はい。

紺野 喋りすぎ。聴いてるでしょ、部外者が。(と、末吉と花村を見やる。)

紺野、カバンの中から自分のハンコを出した。

白鳥 紺野さん。

紺野 ー。

白鳥 押すんですか、それに。

紺野 そうだよ。

白鳥 どうして。

紺野 どうしてつて。

白鳥 紺野さんは、今回の事故と関係ないじゃないですか。

紺野 そんなことないよ。俺も一応マウス室の管理者になつてるから、責任はあるよ。

白鳥 そんなの、実際は名前だけじゃないですか。

紺野、書類に押印する。次の書類、次の書類にも。

白鳥 納得できません。説明してください。

紺野、書類を封筒にしまった。

紺野 後で話すって。出してくるわ。

白鳥 書類を紺野の手から取った。

白鳥 説明してください。でないと渡せません。

紺野 白鳥さん、なにやってんの。返してよ。

白鳥 どうして紺野さんが室長のマウスの担当になってるんですか。事故の原因は本当は紺野さんの過失なんですか。でも投薬って病院から直接指示のあった依頼でしょ。

病院側の責任は不問なんですか。渡された薬が原因だったんじゃないんですか。

紺野 あー・・・。

白鳥 どうなんですか。

紺野 白鳥さんさあ、

白鳥 はい。

紺野 この字、読んで。

白鳥 (一瞬答えに詰まるが) 親展です。

紺野 意味わかるよね。この封筒は、俺が開けなきゃダメなの。俺以外の人間が開け

やダメなの。

白鳥 でも、

紺野 勝手に開けて見たりとか、どうしてそういうことするのかな。これ以上口出すん

なら、ペナルティ付けるよ。

白鳥 (黙った)

花村 紺野さん、白鳥さんは私の代わりに処理しようとしてくれたんです。

紺野 でも「親展」って書いてあるんだから、そのまま俺が戻るまで預かって、俺に渡し

てくれるだけでよかったんじゃないの。そういうことでしょ、普通。

花村 それは・・・

紺野 書類見れば俺と同じように処理できると思ったの。ちよつとずうずうしいよね。

まあ見てもいいけどさ、こうやって不用意に騒ぎ立てられるのって困るんだよ。

白鳥 (反論できなかった)

末吉 紺野さん。

紺野 ん。

末吉 事情だけでも話してもらえませんか。俺、紺野さんのこと信用したいんです。そ

んな風に逃げられたら、ここに居る三人とも、これから絶対わだかまりを残します

よ。

三人、紺野を見ている。紺野はその視線に折れたようだ。

紺野 平たく言うとな、ヤバイのよ、今、うちは。室長も頑張ろうとしてるんだけど

さ、なんせ、親の会社継いだだけのお嬢さまで、マネージメントとかお金の計算に弱

い研究者だから。

末吉 ヤバイって、何がヤバイんですか。

紺野 今ね、病院に、たくさんの業者が売り込みに来てるの。その中には当然、実験動

物を取り扱ってる業者もあってね。早い話が、うちをここから追い出して、その業者がもつと安く、高品質で動物を管理しますよって言ってきてるわけ。そんな時にさ、マズイでしょ、感染症は。しかも室長みずから事故起こしました、なんて言うとき、ホントにちよつとね、名前に傷がついちやうんだよね。

白鳥 だから紺野さんが泥を被るって言うんですか。

紺野 まあ俺ならさ、従業員の過失で、嚴重注意と減給ぐらいで済むから。

末吉 どうして室長のためにそこまでするんですか。

紺野 室長のためじゃないよ。自分のためだよ。こんな会社でもさ、一応俺と家族を食わせてくれるところだからさ、無くすわけにはいかないんだよ。そりゃ嫌だよ。俺何にもミスしてないのにさ、すいませんって、これからあっちこっちで謝らなきゃならないんだからさ。でも、じゃあ本当のことを言って、もし会社がなくなったりしたら、誰が俺と家族を食わせてくれるわけ。

末吉 紺野さん。

紺野 俺のやってることは正しくないかも知れないけどさ、俺に言わせたら、お前達みんな自分の面倒しか見てこなかった奴ばっかりじゃない。そんな奴にどうこう言われたって、こっちは何にも感じないんだよね。

白鳥 こんなこと、受け入れてしまったら、また何かあった時、同じことが繰り返えされますよ。

紺野 その時はその時考えればいいよ。

白鳥 紺野さん。

紺野 溺れかかっているんだから、まず助かる方法を考えないと。岸が上がってからのことをおぼれてる時にあれこれ言っても仕方ないだろ。

花村、書類を取った。

末吉 花村さん。

花村 私が被ります。

末吉 えっ。

花村 私なら同じ部屋でマウスを担当してました。だから私が事故を起こしたことにくてください。それなら、会社も大丈夫だし、紺野さんも責任とらなくていいんじゃないですか。

白鳥 花村さん、何言ってるの。

花村 私、辞めます。

末吉 えっ、

花村 ずっと、いつ言おうかって考えてました。

末吉 花村さん。

花村 ここに来て、マウスを見てて、何をやってるんだろうって思っていました。このマウスたちは何のためにここに居るんだろうって。人間のために、人間の都合で、いびつな状態で生かされて、殺されて。私だって人間だけど、本当は誰かのために、いえ、もしかしたら誰のためにでもなく、いびつな状態で生かされて殺されていくだけなんじゃないかって。

末吉 花村さん。

花村 すいません。

白鳥が何か言いかけるのを紺野が制した。

紺野 花村さんってさ、ちょっとアレだよ。

花村 なんですか。

紺野 さつきから言ってることがよくわかんないんだけど。だってさ、花村さんが事故を起こしたことにしたってさ、ハッキリ言ってる誰も庇えないよ。

花村 でも、

紺野 思いつがるな。

花村 (紺野を見た)

紺野 だって花村さんバイトじゃない。花村さんが被ったって、もう一人、白鳥さんとか他の社員の誰かが監督責任で処分受けなきゃならなくなるよ。そういうこと想像できなかな。

花村 (答えられない)

紺野 花村さんが辞めたところで、誰も助けられないんだよ。

紺野、花村から書類を取った。

紺野 辞めるのはかまわないけどさ、もうちょっとよく考えないと。この話はもう、俺と室長の間で条件詰めて決めた話なんだから。白鳥さんも、末吉も、いいね。

白鳥 はい。

末吉 (答えなかった)

紺野 このことは他言無用。今ここで忘れて。

紺野、出ていこうとして立ち止まり、

紺野 あ、そうだ、花村さん。

花村 はい。

紺野 花村さんはお肉、食べたことあるよね。

花村 (質問の意図がわからない) はい。

紺野 確か魚も好きだった。

花村 はい。

紺野 何が違うの。食べられる肉と、ここの動物と。

花村 えっ。

紺野 人が生きるために必要だから。じゃあウチのマウスたちは必要ないの。

花村 それは、

紺野 俺の奥さんね、元々心臓が弱くって。先天性の冠状動脈硬化症って言うんだけど、

ど、昔だったらさ、不治の病だったのね。でも今はちゃんと手術して治って、心配しただけで子供もちゃんと産んでくれて、元気にやってる。ありがたいよね。その時さ、

あ、その時ってのは、手術して治ったり、子供が生まれた時ね。その時さ、ちょっとだけさ、ほんのちよっとだけ、俺この仕事やってて意味があったのかな、って思った

のよ。わかるかな、俺はさ、目の前の大切な人が生きられるんだったら、ネズミだろうがウサギだろうが、何万匹死んだって構わないんだよ。おかしかな、俺の考え。でも実際そうなんだから、受け入れるしかないよね。わかる、俺の言ってること。

花村 はい。

紺野 まあ、とにかくさ、よく考えて。

紺野、出て行こうとしたが、白鳥が止めた。

白鳥 待ってください。

紺野 なに。

白鳥 今日のお葬式の場所、紺野さんの携帯に転送します。

紺野 なんで。

白鳥 用を思い出しました。私、先に向かいます。

紺野 あ、そう。

白鳥 「ネズミだろうがウサギだろうが、何万匹死んでも構わない。」って。

紺野 ああ。

白鳥 じゃあ、斎藤さんは。

紺野 (返せない)

白鳥 斎藤さんが亡くなったのも構わないんですね。

紺野 そうは言っていない。

白鳥 目の前の大事な人が生きられるんだったら、他の人は死んでも構わないんですか。

紺野 そんなことは言っていないだろう。

白鳥 わかっています。でも斎藤さんは亡くなったんです。亡くなったんです。

紺野 だから。

白鳥 受け入れるしかないと思ってました。

紺野 え。

白鳥 理不尽も矛盾も。生活ってそういうことを受け入れて、辛抱してゆくことだと思っていました。でも、だったらどうして私はここに居るんだろうって、やっぱり思います。だって、悔しいじゃないですか。

紺野 それで。どうするんだ。

白鳥 話します。斎藤さんの家族の方と。

紺野 なに、

白鳥 ハンタウイルスのこと。会社を訴えるかどうかわかりませんが、協力できる限りしてゆくつもりです。

紺野 白鳥。

白鳥 選びたいんです、私。ちゃんと。自分の声にしたがって。

紺野 お前はどっちの人間なんだ。

白鳥 私は、私です。

紺野 気楽だな。身軽だと。

白鳥 そうですね。でもそれも選んできたことですから。自分で。

紺野 そうだな。

紺野、切り上げるように書類を持って出て行った。

花村 白鳥さん。すみません、私が余計なことしたばかりに。

白鳥 そんなことないよ。思い出したから。いろいろ。

花村 え。

白鳥 初めてこの会社に勤めたころに感じてた違和感とか、考えないようにしていたこととか。

花村 ・・すみません。

白鳥 気にしないで。否定的な意味じゃないから。

花村 はい。

白鳥 行ってくる。

花村 はい。

白鳥、去った。少し沈黙。

末吉 花村さん。その、本当に辞めるの。

花村 そうですね、たぶん。

末吉 そっか。

花村 はい。

末吉、それ以上は何も言えなかった。話題を変えるように、

末吉 あのさ、

花村 え。

末吉 小鳥とバラの話。

花村 はい。

末吉 紺野さんの話を聞いて思ったんだ。白鳥さんのこともだけど。

花村 何です。

末吉 さっき「あの物語は恋愛の比喩だ」って言ったよね。

花村 ええ。

末吉 けど、それもやっぱり違ってた。

花村 えっ。

末吉 正確には、恋愛だけを指してる話じゃないんだな、と思った。

花村 どういうことですか。

末吉 あの物語は求めることの比喩だったんだ。

花村 求めること。

末吉 人間でも仕事でも、居場所でも思想でも、求めればそれは「恋」なんだ。何かを求めるとは、心臓に棘をびったりと押し当てて、命を吸わせ続けて、赤い花を咲かせることなんだ。たとえ打ち捨てられることになっても、その赤さと美しさは変わらな

い。

花村 大切な人も、

末吉 大切な人も。  
白鳥 ころろざしも、  
末吉 たぶん。

花村、立ち上がった。

花村 私、戻ります。  
末吉 え。

白鳥 大丈夫、

花村 はい。(ドリンクを見せて) これ、ありがとうございました。

末吉 ああ。

花村 末吉さん。

末吉 はい。

花村 落ち着いたら、また飲みに誘ってください。

末吉 え。

花村、二人に一礼して去った。

末吉、見送った後、コーヒーを入れ直して飲むことにした。

求人雑誌が目にとまり、ページをめくって読み上げる。

末吉 『やりがいとあなたらしさの両立をサポートします。紹介予定派遣。通勤便利。時給千円から。』

末吉、ページをめくった。

末吉 『スキル・経験・人柄重視。研究に専念できるチームワークの良い職場。月給十八万円から。』

末吉、ページをめくった。

末吉 『グローバルに活躍できる。海外企業と連携をとり、お客様のニーズを満たしてゆきましょう。各種保険完備。月給十八万円以上。』

紺野、戻ってきた。

紺野 たぶんその会社、海外生産のブローカーだよ。

末吉 ……ですよね。

紺野 二人は、

末吉 行きました。

紺野 そう。(携帯電話を見た) 俺も行かなきゃな。…あ、そうだ、末吉。お前、字得意か。

末吉 いえ、

レジ袋の中から香典袋と薄墨の筆ペンを取り出した。

紺野 書いてくれる、俺こういうの苦手だよ。

末吉 俺だって苦手ですよ。

紺野 な、頼むよ。

末吉、しぶしぶ書き始める。

紺野、別のレジ袋からキッチンと包装された黒ネクタイを取り出した。

末吉、気付いて、

末吉 あれ、それ。

紺野 ん。

末吉 なかったんですか。百円シヨップ。

紺野 いや、やっぱりちよつとな。ちゃんとしようと思って。気持ちだから。

末吉、文字を書く。

紺野、ネクタイを締めた。

末吉 紺野さん、お昼食べられたんですか。

紺野 いや、まだ。なんか、俺も食欲なくなつてね。

末吉 カレーがいいですよ。食欲のない時は。

紺野 カレーか。

末吉 ジャングルの戦場で一番必要ですから。生き延びるために。

紺野、コーヒーサーバーから自分の分を注いで入れた。ふと思いついたように、

紺野 な、コーヒーって葉だったって知ってるか。

末吉 え、いいえ。

紺野 エチオピアだったかな、山でね、ヤギがコーヒーの木の実を食べて元気になったのを、ヤギ使いが見てて、茹でて飲んでみたら、元気になったっていうのが起源らしいよ。

末吉 へー。

紺野 豆知識。コーヒーだけに。

末吉、ちよつとくやしい。

末吉 じゃあ俺も豆知識。

紺野 なに。

末吉 昔ある国の王様が二人の死刑囚を使って実験をしたんです。毎日1杯ずつ、片方にはコーヒーを、もう片方には紅茶を飲ませ続けてどっちが長生きするかっていう。

白鳥 ヒドイことするね。

末吉 言い伝えますから。

紺野 それで、

末吉 さて、この実験で、誰が一番長生きしたでしょうか。

紺野 なに、またクイズなの。

末吉 はい。

紺野 面倒くさいよ、お前。

末吉 降参ですか。

紺野 いや、待って待って。んー、紅茶の人。

末吉 ブーツ。

紺野 じゃあコーヒー。

末吉 ブーツ。

紺野 え。

末吉 正解は、実験させた王様の方が先に死んでしまっ、囚人たちはどちらも長生き  
しました、です。

紺野、答えに不満そうだが思わず笑ってしまう。

紺野 そんなのアリ、

末吉 アリです。

紺野、コーヒーを一口飲んだ。

紺野 苦いな。

末吉もコーヒーを飲んだ。苦さが口に広がった。

溶暗。

終幕

#### 参考文献

『幸福な王子』（オスカー・ワイルド・西村孝次 訳）新潮文庫